lecture

Manga/Anime

川上未映子さんのドラえもんと私

Takaoka

身体と観念を縦横に行き来し、読む者の感性を挑発し続ける芥川賞作家の川上未映子さん。彼女が語る「ドラえもん」の魅力には、善と悪の両義性を突いた最新作『ヘヴン』を読み解く鍵がある?!

話＝川上未映子　構成＝コヨーテ編集部
talk by Kawakami Mieko　composed by Coyote

私は76年生まれなので、物心ついた時からテレビでドラえもんが流れていました。その後、てんとう虫コミックスで一巻一巻読んでいったのですが、最初は動くドラえもん。大山のぶ代さんの声とセットで知りました。

なんと贅沢なことに、当時は月曜から木曜までの夕方の10分間、毎日藤子先生のアニメをテレビで見ることができました。しかも金曜は特別に30分間、メインディッシュのような感じでドラえもんを放送してくれました。だから私の幼少期の思い出は、ドラえもん三昧。毎日毎日藤子先生の絵とストーリーにものすごくコミットしながら子供時代を過ごしたわけです。

その頃、ドラえもんを一冊まるまるチラシの裏に書き写したことがありました。7歳だったので、何巻だったかは覚えていませんが、母親と一緒になってチラシを切って描きました。けっこう時間がかかるし粗悪な紙だったので、描きあがる頃にはぼろぼろなんですけれども、一所懸命に写してそれを藤子先生に送ったんです。

すると忘れた頃にF先生のお葉書と下敷きが送られてきました。あの頃、全国には同じような藤子狂い、ドラ狂いの子供たちがいっぱいいましたから、藤子プロダクションの方が対応してくれたんだと思いつつも、それがすっごくうれしかった。子供とはいえわかっているんですね、作者にとって自分が砂粒みたいな存在であることは。それなのに、いてもいなくてもいいような自分の所にまで反応がくるんだと、こちらからドラえもん的な世界に対してコミットすることができるんだということに感動したことを覚えています。

とはいえ、そもそもどうしてアニメは星の数ほどあったのに、ドラえもんだけがこんなにも私の心をとらえてはなさなかったのでしょう？　思い当たることはたくさんありますが、今日はその中から3つばかりを挙げてお話してみようと思います。

それにしても、F先生のアニメのキャラクターを見てみると、だいたい機械とかロボットとか猫だとか、背後に先行するものを想像させる可愛さがある。ところが、ドラえもんとオバQだけはけっこうギリギリのキャラなんですね。ドラえもんは、たしかにかろうじて猫です。かつては耳があったし鈴もついている。でもね、じーっとよく見てみると、もう本当に200年でもぶち抜きで耐久するすごいオリジナリティがある。F先生が生み出したキャラクターの中でも、ドラえもんは飛び抜けて揺るぎのないインパクトを持っています。

F先生は子供をあやす「起き上がり小法師」を見てヒントを得たとおっしゃっていますが、そこからここに来るまでの想像力の強さは驚きですよね。今となれば、このキャラとか色は特異だよね、類例がないよね、で済ますことができますが、でもまっさらな状況の中で、このキャラクターで行くんだ！って腹を決めたとき、F先生の中で不安はなかったのでしょうか。そう思うと、やっぱり一流の作り手というのはその初期設定からして違うんだな、と感じます。

でも子供は、そんな風に言葉でわかろうとはしない。毎回毎回が一対一の出会いで、それだけを見て楽しんだり受け止めていく。その時のインパクトは何かというと、子供は直線的なものや四角いものよりも丸いものとの親和性が高いですよね。ドラえもんにはたくさんの丸があって、丸の中にさらにたくさんの丸が組み合わさっていて非常に親しみやすい。ところが一方で、ドラえもんを描いてみなさいと子供に言ってもうまく描けないんですよ。特に目と交わる線が上に行ったり下に来たり。慣れ親しんで無条件に受けとめながらも理解しづらいところがある。

絵の上手い下手ではなく、ドラえもんのビジュアルには、どこかで子供の感覚をちょっとだけ不安定にさせる要素があるんです。安定の象徴の中に、ある種不安定な象徴性も兼ね備えている。それがやっぱりいつまでたっても飽きさせない、言葉にならない緊張感を子供に、日本人全体にじわじわと効かせているんじゃないでしょうか。

今申し上げたのは「ビジュアル」の話で、2つ目に「内容」があると思うんです。ドラえもんという永遠に続く日常、繰り返されていく日常の中で、のび太は本当にあのまま成長しないでいいのか問題がよく指摘されます。

ある読者が、つねにドラえもんが世話を焼いてくれる状況というのはあり得ないのだから、もう夢を見させるのはやめて厳しい現実に直面させた方がいいんじゃないですか、とF先生にたずねた。そうしたら、普段はあまりしゃべらない先生が、いや、と口を開いて、のび太はああだからのび太なので、のび太のままでいいんです、って答えられたそうなんです。そして、その後もずっとずっと懲りもしない展開がくり返されていくわけなんですけれども、私たちは多分そこに、すごく普遍的なものを見ている、感じ取っているんじゃないかと思うんですね。

鉄腕アトムをはじめその他なんでもいいんですけれど、ほとんどの国民的なアニメは大人が描く勧善懲悪の物語ですね。善いものが正義を全うし悪いものを駆逐する。でも、ドラえもんの物語の構造というのはそことはまったく違っていて、成長しないのび太を含めて、基本的にすべてを肯定していく全肯定の世界です。それは他力本願ののび太を単に全肯定するというわけではなくて、ドラえもんだけでなくバーマンでもキテレツ大百科でも、F先生は同じメンバーで同じ時期、同じ町内を舞台にくり返しくり返し、お話のパターンだけを変えながら作品を描き続けます。

これって私には、子供時代の本当にイノセントでしかないある時期の、小学校でいえば一年から四年生あたりのかけがえのない時期のイノセンスを、理屈抜きに全肯定している、そういうことのあらわれなんじゃないかと感じられるんですね。そして、その全肯定というのはただ気持ちがいいというだけのものではなくて、私たちが共有してきた体験として、私たちの財産のようなものとしてあるんじゃないか。

たとえば心理学の分野では、母親は生まれた子供を一秒でも長く抱いてやることが大事、どれだけ抱きしめてやっても足りることはないと言います。もちろん人それぞれだし環境によって違うこともあるとは思いますが、一般的には、これは自分の存在に対して無条件に抱きしめてくれる人がいるんだ、無条件に受け入れてくれる存在があるんだということを体に教え込む効果があるそうです。

たとえ記憶として思い出せなくても、そういう体験が3歳までの時期にあると、成人した時にそれが強さに変わって、一人で生きていく力になる。です

から大人になってちょっと問題を抱えた時には、子供に戻って無条件に愛される体験を追体験させる育て直しというプログラムがあったりします。それぐらい無条件に肯定されるということが私たちに与えてくれる力は大きい。

もちろん、ドラえもんが直接抱きしめてくれるわけではないけれども、のび太の姿から私たちが間接的に読み取る物語の中で、のび太が受けている絶対肯定を私たちもまた感じているはずなんです。それは実際の母親から受ける全肯定の愛とは似ても似つかない種類のものかもしれませんが、毎週毎日慣れ親しむ物語として私はじわじわとそんな力を受け取っていたんじゃないかということを、今になって思うことがあります。

3つ目に挙げたいのは「道具」についてです。F先生の作品の中でドラえもんだけがどうしても何かが違う。何が違うのかなと考えてみると、例えばキテレツ大百科などは、同じような人間関係がくり返される中でドタバタが起き、やがて事件が解決されていくのを楽しむというかなりスタンダードな展開で一話が完結していきます。

ところがドラえもんの主人公というのは、毎回登場する道具なんです。ドラえもんやのび太たちは、実はそれに付き従う脇役にすぎない。そのためいつも主人公が変わっていくという、非常にユニークな展開の仕方をとっています。そうすると、出会ったことのない主人公が毎回登場してくるわけですから自動的にスリリングさが持続していく。出てきた道具の使い方に対して読者は、あっ、オレもこれ考えた！とか、こんなこと考えもしなかったなあ！ という共感や驚きが働くし、それを覚えるという二次的な欲求も生まれます。

しかももう一歩踏み込んで言ってしまうと、ポケットから出てくる道具のアイデアというのは、言ってみればF先生でなくとも無限に作れるものなんですよね。そのつど新しいアイデアを出し合っていけばいい。つまり、ドラえもんというのはF先生だけにしかできない仕事ではないんです。だからダメ、なのではなくて、そこが、そこそがすごい発明なんです。誰が手がけても続けていけるというひとつの型を提出したことが、F先生の破格にすばらしいアイデアだったんじゃないか。何世代にもわたってドラえもんはずっと引き継がれて残っていくことができる。そういう発明なんですね。

そんなF先生が主人公である道具を、どうやって私たち大人も子供も楽しめるようにしたかというと、道具自体は道具なんだ、ということを徹底したことだと思います。つまりドラえもんに登場する道具自体には善いも悪いもない。はじめから善いも悪いも提示しないんです。時と場合と使う人の思惑とか品性によって、異なる結果がいつも導かれるようになっている。そうやって、子供ながらに考える余地を与えている。

子供の頃、イタリア語に翻訳されたドラえもんを見て、すごく居心地が悪いのと、外国に認められてうれしいのと、でも私たちのドラえもんがイタリアの子供たちにとられてしまうという嫉妬半分の複雑な気持ちになったことがありました。でも実際のところ、キャラクターとしてのドラえもんはウケているかもしれないけれど、その内容は西洋ではあまり取り上げられないという話を聞いたことがあります。そのひとつの要因は、私は善悪の曖昧さなんじゃないか。勧善懲悪の物語でないことが西洋でウケにくい原因なんじゃないかと思うんですね。

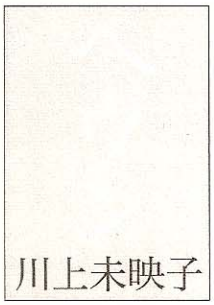
いずれにせよ、F先生が何かを学ぶ時期にある子供たちに差し出している問いには、思っている以上に深いものがある。でも、絶対的なものがなかったら人は不安になりますよね。すべては相対的なんだって言ってしまったら、右も左もわからなくて心細くて仕方がない。だからこそ先ほど申し上げたように、ドラえもんというのび太にとって自分を全肯定してくれる、いわば絶対的な愛をそこに入れることによって、問いと救いを物語の中に同時に結実させているのではないでしょうか。

もちろん、そんな風に大人の言葉で整理するようには、子供たちはドラえもんを読んだりはしていません。でもその温度とか呼吸を通して多分深いところでそうしたことを理解しているんだと思うんです。

ドラえもんというのはひとつのキャラクターであると同時に友だちであり母親であり先生であり、他人ですね。しかもロボットでありながら、どんなキャラクターよりも人間っぽい。いつも見守ってくれているだけでなく、時には守ってやらなければならない弱い存在でもある。私たちが人生を通して経験の中で結んでいく人間関係というものを、ほとんどすべて体現しながら演じてくれている。それがこのドラえもんという物語が、他の漫画やアニメには絶対に追いつけないものを秘めている所以です。

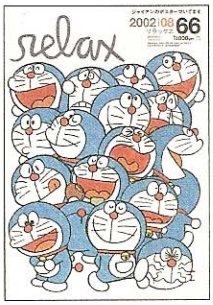
そして、今こうして、私自身が物語を書いて人に読んでもらう立場になって思うのは、世の中ではこれはアカンことや、悪いことやって言われてる、でもなぜそうなのかと子供たちにたずねられた時、それが決まりだからや！ではなくて、自分の頭で考えてその考えに基づいて語りかけることができるようでありたいなということ。そう思うのは、ドラえもんの影響だなあ、とつくづく思うし、私もまたそういうことを問うような作品を書いていきたいなと思っています。Ⓒ

> 藤子・F・不二雄先生の作品以外にも
> 漫画やアニメは星の数ほどもあったのに、
> どうしてドラえもんだけがこんなにも
> 私の心をとらえてはなさないのか？



03

02



01

01 川上さんが愛読する、雑誌「relax」のドラえもん特集（2002年8月号）。F先生の貴重な資料が満載です。右の見開きページは、同特集に収録されたF先生の手になるキャラクター一覧

02 もう一冊のオススメ本が「ドラえもんのはじめてのえいかいわ」。ボタンを押すと流れる「グッモーニン・ドラミ～」と「グッナイ・ドラミ・・」の声にメロメロの川上さん。講演会の最後にみんなで何度も拝聴。病みつき間違いなしの発音。必聴です

03 最新刊の『ヘヴン』。あの魅力的な大阪弁は封印されているが、哲学性は全開。善悪の根源に揺さぶりをかける意欲的な作品です

● ここに掲載したテキストは、2009年9月5日、ドラえもんの生みの親、藤子・F・不二雄さんの故郷、富山県高岡市にて開町400年記念協賛事業の一環として開かれた「川上未映子、トーク。」フォーラムにおける講演「ドラえもんとまちをめぐるおはなし」から、一部を抜粋して掲載したものです

●76年大阪生まれ／作家・ミュージシャン・女優。08年に「乳と卵」で芥川賞受賞。09年に詩集『先端で、さすわ ささされるわ そらえええわ』で中原中也賞を受賞。現在公開中の映画「パンドラの匣」で女優デビューを果たす

■ドラえもん 69年に小学館の学年誌にて藤子不二雄名義で連載開始。73年にテレビアニメ化されるも半年で終了するなど注目度はあまり高くなかったが、77年の「コロコロコミック」の創刊を機に単行本、映画、テレビアニメが大ヒット。一気に国民的作品となる。現在、ドラえもんを含む「藤子・F・不二雄 大全集」が刊行中

協力：「川上未映子、トーク。」実行委員会